

【漢方医学のバイブル 傷寒雑病論（しょうかんざつびょうろん）のこと】

漢方薬を有効に活かして患者さんを治療する私たち漢方医が、一度は目を通すべき書物の一つが傷寒論（しょうかんろん）です。

「ええ？先生、今月はお医者さん向けの話なの？」

いえいえ、そんなことはありません。まあ、ゆっくり読んでくださいね。傷寒論は西洋医学の教科書と違って、消化器や循環器といった系統的な臓器ごとに病態や薬方が記述されているのではなく、あくまでも患者さんに漢方薬を役立てる上での治療指示が書かれている書物で、成立は紀元 200 年頃（中国では後漢の時代）といわれています。張仲景（ちょうちゅうけい）の編著といわれていますが、あくまでも古来からの薬方を採録し、彼の疾病観をもとに編成されたものとみることができます。傷寒は、カゼ症候群に代表される急性熱性疾患と考えられていますが、病は変化する、そして病人も変化することを前提として書かれているところが特徴といえます。発病から死に至るまでの経過の中から、代表的なパターンを取り上げて、それに対してどういった薬方を出すべきかが記述されています。

疾病は、生体の「かたち」と「はたらき」の不調和からくるものであり、その変化を私たち人間の体に備わっている自然治癒の働きを踏まえて、様々な病態が表現されています。患者さんにお薬を出した時、その薬の効果との関連で生体はまた変わりますね。時として、生体の治癒反応を助けると同時に、回復しようとする力を妨げる場合もあるわけです。西洋医学の考え方では、治療とは自然現象を克服するという立場ですから、お薬の特定の一面が強調されています。これに対し、東洋医学では自然に順応するという発想で、お薬の様々な作用を期待しています。わかりやすくいえば、自力で治ろうとする方向を正しくとらえることが東洋医学的な病態の把握であり、漢方薬はあくまでもその援助の一つということです。東洋医学的な診断・治療は、「証（しょう）にしたがって治療を進める」のが原則ですから、まずは病人さんの証をとらえることから始まるわけです。証は、単に症候群の診断ではなく、現在の症候に至った経過をふまえて、これからどう病気が変化していくのかを予測することまで含んだものです。

私は、患者さんの病態は常に変化していることをふまえる、という発想をしっかりとつことで「かたち」と「はたらき」とをあわせて生体を見つめる必要性を痛感するわけです。